青年期における「ゆるされること」に関する質的検討

ゆるされ体験の構成要素の把握

○小川基¹・高木秀明²

(¹横浜国立大学大学院・²横浜国立大学)

キーワード：ゆるし、ゆるされ体験、質的研究

A qualitative study of “Receiving Forgiveness” in adolescence

Motoi OGAWA¹ and Hideaki TAKAGI²

(¹Graduate School of Yokohama National University, ²Yokohama National University)

Key Words: forgiveness, receiving forgiveness, qualitative study

目 的

ゆるし(forgiveness)は近年、諸外国を中心に研究されるようになり、現在は日本においてもゆるしの研究がなされている。日本での研究の多くは「ゆるす側」の視点にたった研究であり、「ゆるされる側」についての研究は見当たらない。しかし、諸外国においては、「ゆるされること」(receiving forgiveness)の研究も既に行われている。

我が国においては、「ゆるされること」に関する実証的な研究は未だ見られない一方で、日本人にとっての「ゆるされること」に関する精神分析的考察を、古澤平作の阿闍世コンプレックスの中に見出すことができる(小此木・北山, 2001)。阿闍世は、自らの出生の由来において、母親が自分を殺そうとした事実を知り、幻滅のあまり母親を殺そうとした。結果、阿闍世はその罪悪感から病を患うが、その際に、自らが殺そうとした母親から看病を受け、結果的に病が癒される。この場面について古澤は、母親の自己犠牲的な看病を通して、阿闍世は母親を殺そうとした自分の罪へのゆるしを体験し、懺悔心がうまれるとし、この懺悔心について“懺悔心は、処罰恐怖をゆるされたことによって得られる「ゆるされ型罪悪感」でなければならない”と述べている。

このように、我が国における阿闍世コンプレックスの理論において「ゆるされること」の特徴が考察されており、これに関しての実証的研究が行われることで、これらの考察が検討されることが可能であると考えられる。それに先立ち、本研究では我が国における「ゆるされること」の現象の構造を探索的に把握することを目的とし、ゆるされ体験の構成要素に関する質的検討を行う。

方 法

調査対象者：大学生 176 名(男性 77 名、女性 99 名)であった(平均年齢 20.37 歳、SD=0.96)。

調査内容：自分が傷つけた相手にゆるされた体験の概要、ゆるされたと感じるまでの感情や思考、行動に関する質問紙での自由記述を求めた。

結 果

得られたデータを、心理学を専攻する大学院生 4 名が、KJ 法を参考にカテゴリー分類を行った。その結果を表に示す。

考 察

ゆるされ体験の構成要素として、ゆるされる人間が体験する「感情」「思考」「行動」という 3 つと、ゆるされる人間に影響を与える「外的要因」というカテゴリーが得られた。ここから、「ゆるされ体験」はゆるされる人間だけではなく、ゆるす人間や第三者などといった他者との関係に影響を受けるものであることが示唆された。

また、感情において、最も多く見られたものとして、「罪悪感」などの「傷つけたことへの反省感情」があったが、ゆるされる前だけでなく、「ゆるされた後も残る罪悪感」が存在することが明らかとなった。これは、古澤が指摘する処罰恐怖

をゆるされたことによる懺悔心に関するものである可能性がある。しかしこれに関しては、本調査からの結果からは断定できない。今後は、ゆるされ体験をプロセス的な観点から検討することで、より詳細にゆるされ体験の構成要素とその因果関係を明らかにする予定である。

表 ゆるされ体験の構成要素に関するカテゴリー分類結果

感情	傷つけたことへの反省感情	後悔
		罪悪感
		心苦しさ
		申し訳なさ
		自己嫌悪
		恥
	自らの傷つき	気まずさ
		悲しみ
		いらだち
		傷つき
		先行き不安
		絶望
思考	ゆるされた後のポジティブ感情	ゆるされたことへの安堵感
		ゆるされたことへの嬉しさ
	ゆるされた後のネガティブ感情	ゆるされた後も残る罪悪感
	ネガティブ思考	相手への理解できなさ
		言い訳
		回避
	ポジティブ思考	謝罪の願望
		関係修復への願望
		解決方法への模索
行動	反省	反省
		自分の行動の振り返り
		相手の気持ちを考える
	体験からの気づき	体験から教訓を学ぶ
	ゆるされるための直接的努力	償い
		謝罪
		相手に普段通りに接する
		話し合い
		周囲への働きかけ
		友人に相談
		先生・先輩に相談
		家族に相談
		距離を置く
外的要因	ゆるされるための間接的努力	行動の改善
		自分の中での整理
		第三者からの働きかけ
		相手からの働きかけ
	外界からの働きかけ	時間の経過
		時間の経過

引用文献

小此木啓吾・北山修 編(2001) 阿闍世コンプレックス 創元社